

# International Relations 2 : Notes

David Wessels

国際関係論 2 : ノート

デヴィッド・ウェッセルズ

Copyright © 2009 by David Wessels

© 禁無断転載

David Wessels  
Sophia University  
7-1 Kioicho, Chiyoda-ku  
Tokyo 102-8554  
Japan

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学

<http://www.sophia.ac.jp>

# International Relations 2 : Notes

David Wessels

国際関係論 2 : ノート

デヴィッド・ウェッセルズ

2009

## 国際関係論 2

### 目次

	参考文献	J 2
第一章	はじめに	J 3
第二章	理論を求めて	J 4
第三章	現実主義	J 6
第四章	平和維持活動	J 8
第五章	多元主義	J 10
第六章	人権論	J 12
第七章	グローバリズム	J 14
第八章	人々の移動と国際関係	J 16
第九章	グローバル化—その光と影	J 18
第十章	ガバナンス（統治）	J 20
第十一章	理論の軸—協調と対立	J 22
第十二章	国際関係論と人間	J 24
第十三章	コンストラクティヴィズム	J 26

## 参考文献

有賀貞、その他（編）〈講座国際政治〉（1）『国際政治の理論』  
（東京大学出版会）

杉江栄一、樫木貞雄共編著 『国際関係資料集』（法律文化社）

P. ビオティ、M. カピ著（ウェッセルズ・石坂訳） 『国際関係論—現実主義・  
多元主義・グローバリズム』 第二版（彩流社、1993）

進藤栄一著 『現代国際関係学—歴史、思想、理論』（有斐閣、2001）

日本の国際政治学（全4巻、2008—2009）

第1巻『学としての国際政治』（田中明彦等責任編集）（有斐閣、2009）

## はじめに

1. 以下の章のノートは、大学レベルでの国際関係論の入門コースの二学期向けに用意した。以前、配布した『国際関係論1ノート』の続きである。

2. 前期の焦点は、現代国際関係論の基本となる歴史と概念であった。こうした現代理論の構成要素は、以下の頁で展開する理論とアプローチのサーベイの基礎である。このノートは、現在の理論を網羅する報告書ではなく、むしろ国際関係の理論家が当該分野へ接近する手引きである。

3. 「現実主義」、「多元主義」、「グローバリズム」の範疇は、ポール・ビオティとマーク・カピが執筆した『国際関係論—現実主義、多元主義、グローバリズム』（第一版、第二版、第三版）という教科書で用いられる三つのイメージに相当する。教育的な目的がこのイメージにある。すなわち、入門コースで学者の種々で複雑な理論を説明するためにふさわしい枠組みを提供することである。それぞれの範疇は、事例研究を通して例示される。

4. 21世紀初頭、標準的な範疇に入らない国際関係論の概念と考えが広く使われている。このような概念—たとえば、グローバル化と統治（共治）—もこのコースにふさわしい形で紹介する。

5. 二学期の授業は一般概念から始まり、それらの概念を利用する理論へと進む。そしてグローバル政治と国際関係の変わりゆくパターンを理解するために用いられるような新しい考えにまで進む。

## 理論を求めて

1. 国際関係は理解しようとする対象そのものである。しかし、「国際関係論」という分野を私達が持つ考えや知力によって学ぶ。

- \* 思想史は何らかの手がかりを与えてくれる。
- \* 世界中の人々の関心によって、何を学ぶ必要があるのかが示される。
- \* 広い理解（一般理解）と個別の理解（個別理解）の両方が求められる。
- \* 国際関係をどのように理解するのかを伝えるためには、言語、概念、理論がなければならない。

2. 理論家が用いる鍵概念の復習

- \* 国家とその他の行為体
- \* 軍事的安全保障、経済的相互依存、人権の擁護、その他の目標
- \* 国家の対外政策
- \* 国際システム
- \* 行為の規範

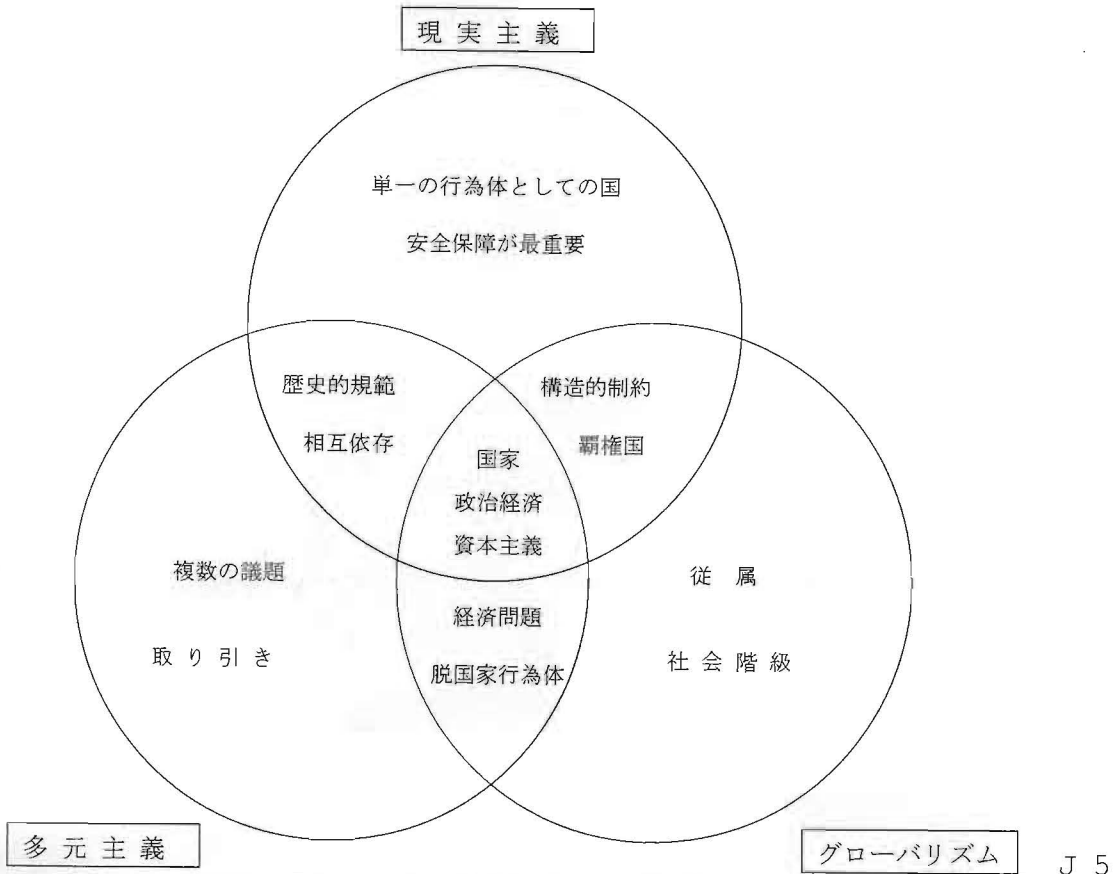
3. ビオティとカピは、3つの「イメージ」によって、今日の「国際関係」においてよく知られた理論を要約しようとした：現実主義、多元主義、グローバリズム。

- \* 個別的理論は、多かれ少なかれ、さまざまなイメージにあてはまる。
- \* 理論のあるものは折衷であり、その研究は複数のイメージにあてはまる。
- \* 3つのイメージそのものが特定の理論であるわけではない。しかし、イメージを「理論的に」（理論的なやり方によって）使って、国際関係をより良く理解することができる。
- \* 3つのイメージは、ある程度まで重複する。思想史において何らかの共通の根を持つからである。

4. ビオティーとカピの三つのイメージの比較 (『国際関係論』、p. 29)

	現実主義	多元主義	グローバリズム
分析の単位	1. 国家が主要な行為体	1. 国家と非国家行為体が重要	1. 階級、国家、社会、非国家行為体が世界資本主義システムの部分として作用する
行為体観	2. 国家は単一の行為体	2. 国家は構成要素に分解される。構成要素には脱国家的に作用するものもある	2. 歴史的展望、特に世界資本主義の絶え間のない発達から国際関係を考察する
行動の動態	3. 国家は外交政策において自己の利益、目的の最大化を求める合理的な行為体	3. 外交政策決定や脱国家的過程は紛争、取引、連合、妥協を含む。必ずしも最適な結果に終わるわけではない	3. 社会内、社会間における支配のパターンが焦点
問題領域	4. 国家安全保障の問題が最も重要	4. 複数の議題。社会経済(福祉)問題が国家安全保障問題と同列あるいはそれ以上	4. 経済的要因が最も重要

5. 三つのイメージの部分的重複





## 現実主義

### 1. 前提

- \*分析の単位：国家が主要な行為体
- \*行為体観：国家は単一の行為体
- \*行動の動態：国家は外交政策において自己の利益、目的の最大化を  
求める合理的な行為体
- \*問題領域：国家安全保障の問題が最も重要

### 2. 先駆者

- \*トウキュディデス、マキアヴェリ、ホッブス
- \*グロティウス：国家間の秩序維持は国際法の規範による
- \*クラゼヴィッツ：国家の軍事的な目標は重要だが、それはより大きな政治的目標の下位にある
- \*E. H. カーク：『危機の二十年：1919－1939』

### 3. 権力（パワー）

- \*定義：いくつかの要素
  - (1) 絶対的権力と相対的権力
  - (2) 静的権力と動的権力
  - (3) 源泉と結果
- \*測定
  - (1) 国家の要素（例えば、モーゲンソー）
  - (2) 物質的要因、心理的要因
  - (3) 単一の行為体を本当に仮定することができるのか？
  - (4) 権力の一般的測定、時と場合あるいは問題による権力

#### 4. 体系（システム）

- \* 「均衡」の概念
- \* 属性の分布なのか、それとも相互作用なのか？
- \* 国際体系とは、二国間の関係（二者構造）の大きな集合なのか、それとも全体の状態のことなのか？
- \* 無政府状態（アナーキー）と国際政治の構造
- \* 自助の原則
- \* ルソーの「鹿狩りの寓話」

#### 5. 脆弱性：強者と弱者の間の不均衡

- \* 軍事（科学技術、兵器、組織、規模、指導性）
- \* ロシアの国境の事例、ラテンアメリカにおける米国の事例
- \* 経済的要因（食料、石油、先端技術）：大恐慌の事例、中東の事例
- \* 覇権国：平和と安定の源なのか、恐怖と羨望の対象なのか？

## 平和維持活動

1. 「平和」という言葉は、多くの言語において、個人、家族、社会、および国際の問題について、ある範囲の活動と状態を指し示すために使われている。

\*ヘブライ語の「シャローム」は有名な平和の挨拶である。

\*「平和」は、特に国家間の戦争や紛争と対比される。

\*解放、連帯、価値達成の戦略

2. 「平和研究」と「紛争解決」は、学術、研究環境のなかで平和の問題に取り組む学問分野である。

\*戦争の原因

\*初期の研究：Q. ライト、P. ソロキン、L. リチャードソン

\*J. ガルトゥングの「帝国主義」論

\*消極的平和（戦争の不在）と積極的平和（経済的厚生、社会正義、政治的自由）

\*冷戦の特殊条件、冷戦後の条件

\*政策は、戦争の準備や抑止戦略から軍縮や紛争の平和的解決まで、広い範囲にわたる。

\*「予防外交」と「紛争予防」は冷戦後の課題

3. 平和と戦争についての規範的立場のいろいろ

\*平和主義

\*聖戦

\*正戦：戦時における権利、戦争をする権利

\*正戦の条件：正当な事由、権能をもっている公権、相対的正当性、正しい意図、最後の手段、成功の確率、つり合いの原則（参考：『平和への挑戦』，1983）

#### 4. 平和の構築

- \* 紛争解決
- \* 信頼醸成および安全保障構築のための措置
- \* 武器貿易のコントロール
- \* 経済的転換（軍事用から民生用へ）
- \* 軍備管理、軍縮

#### 5. 国連の平和維持活動

- \* 国連の手段（参考：ブトロス・ブトロス＝ガリ『平和への課題』1992年7月17日、『続編』1995年7月3日）：
  - 予防外交
  - 平和創造
  - 平和維持
  - 紛争後の平和建設
  - 軍縮
  - 制裁
  - 実施行動
- \* 国連と各国政府との協調；国連と地域機関との協力（例）：
  - 協議
  - 外交支援
  - 活動支援
  - 共同展開
  - 合同活動
- \* 国連の平和維持活動（PKO）
  - 現在のPKO
  - 日本とPKF

## 多元主義

### 1. 前提

- \* 分析の単位：国家と非国家行為体が重要。
- \* 行為体観：国家は構成要素に分解される。構成要素には脱国家的に作用するものもある。
- \* 行動の動態：外交政策決定や脱国家的過程は、紛争、取引、連合、妥協を含む。必ずしも最適な結果に終わるわけではない。
- \* 問題領域：複数の議題。特に注目されるのは、社会経済（福祉）問題が国家安全保障問題と同列あるいはそれ以上の重要度。

### 2. 先駆者

- \* ロック (John Locke) と自由主義
- \* 19 世紀の功利主義
- \* 利益団体自由主義とアメリカ政治
- \* ジェームズ・マディソン (James Madison)、アレクシス・ド・トクヴィル (Alexis de Tocqueville)、アーサー・ベントレー (Arthur Bentley)、デヴィッド・トルーマン (David Truman)、ルイス・ハーツ (Louis Hartz)
- \* ハロルド・ラスウェル (Harold Lasswell)、ロバート・ダール (Robert Dahl)

### 3. 政策決定論

- \* 行動主義 (Snyder, Rosenau)
  - \* 認知と集団心理学：なぜ政策決定者はときとして非合理的な行動をとるのか？ (Jervis)
- \* グレアム・アリソン (Graham Allison) の 3 つのモデル
  - (1) 合理的行為体モデル
  - (2) 組織過程モデル
  - (3) 官僚政治モデル
- \* 国際政治と国内政治の相互作用
  - (1) 連繫政治 (Rosenau)

(2) 二重レベル・ゲーム (ロバート・パットナム Robert Putnam) 2つの交渉テーブル (国際交渉、国内交渉)、「勝てる範囲」 (win-set)

<二重レベル・ゲームの説明>

国際交渉では、A国側が国内で承認を勝ち取る範囲とB国側が国内で承認を勝ち取る範囲が重複するところで合意がなされる。それぞれの「勝てる範囲」が広いほど、譲歩の幅も広くなり、したがって合意に達する可能性も大きくなる。



(3) 地球政治, グローバル化、ガバナンス (統治)

4. 国際関係の理論における進展

- \* 相互依存
- \* 協調の理論
- \* 規範の重要性: 国際体制 (レジーム) 論
- \* 制度の役割: ネオリベラル制度主義
- \* 自由意志論は決定論よりも重みがあるとされる

5. 多元主義についての論争

- \* 巨視 (マクロ) 理論と微視 (ミクロ) 理論
- \* 国家と非国家行為体の相対的重要性
- \* 自由主義論者の国際関係に対する楽観論
  - (1) 商業自由主義
  - (2) 民主主義国家間の平和 (democratic peace)
  - (3) 戦争の費用 (コスト) と文明の進歩
- \* 国際関係についての多元主義的思考に対する悲観論
  - (1) 相対的利得の問題 (relative gain)
  - (2) 人間性と紛争
  - (3) 国際構造における無政府状態

## 人権論

1. 「国際人権章典」
  - \* 国連憲章 (1945 年) : 序章、第 1 条、第 55 条、第 56 条
  - \* 世界人権宣言 (1948 年) : 前文と 30 ヶ条
  - \* 経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約 (採択 1966 年 ; 発効 1976 年)
  - \* 市民的及び政治的権利に関する国際規約 (採択 1966 年 ; 発効 1976 年)
    - + 第一議定書 (個人申立)
    - + 第二議定書 (死刑廃止)
  
2. 国連の活動
  - \* 国際組織による伸張と擁護
  - \* 経済社会理事会の人権委員会
  - \* 1503 手続き
  - \* 世界人権会議 (ウィーン宣言及び行動計画、1993 年 6 月)
  - \* 国連人権高等弁務官事務所 (1994 年)
  - \* 国連人権理事会 (2006 年)
  
3. 人権外交
  - \* ヘルシンキ・プロセス
  - \* カーター大統領の外交政策
  - \* 「ひも付き」援助
  - \* 新欧州のためのパリ憲章 (1990 年)

#### 4. 国際人権保障

- \* 国際法：個別条約

- \* 地域国際組織

  - + 欧州一人権及び基本的自由の保護のための条約(ヨーロッパ人権条約、署名 1950 年；効力発生 1953 年)；ヨーロッパ人権委員会；ヨーロッパ人権裁判所

  - + 米州一人権に関する米州条約(採択 1969 年；効力発生 1978 年)；米州人権委員会；米州人権裁判所

  - + アフリカー人及び人民の権利に関するアフリカ憲章(バンジュール憲章、採択 1981 年；効力発生 1986 年)

- \* NGO（非政府組織）の役割

#### 5. 人権の普遍性と個別性

- \* 「アジア型」人権がありうるか？

- \* イスラムと人権

- \* 人権のモラトリアムがありうるか？(経済成長等のための独裁政権)

- \* 権利と責任

#### 6. 人権と人間の安全保障

問題設定：人間は常に安全を求めている。従来、国家が国民の安全を軍事行動により保障した。防衛と戦争防止が国家の重要な役割と考えられた。しかし、冷戦後の世界では古典的な国家間の戦争(国際戦争)よりも、内戦(国内戦争)、テロ、人権侵害、経済不安、アイデンティティなどの問題を安全保障の脅威として考えられる。国家ではなく、人間を中心にした安全保障論の試みが見られる。人間の権利(すなわち人権)がその新しい世界観の重要な概念である。



## グローバリズム

### 1. 前提

- \*分析の単位：階級、国家、社会、非国家行為体が世界資本主義システムの部分として作用する。
- \*行為体観：歴史的展望、特に世界資本主義の絶え間ない発達から国際関係を考察する。
- \*行動の動態：社会内、社会間における支配のパターンが焦点である。
- \*問題領域：経済的要因が国際関係の最も重要な要因である。

### 2. 先駆者

- \*マルクス (K.Marx)：資本主義の歴史的展開、プロレタリア革命
- \*ホブソン (J.A. Hobson)：資本主義が帝国主義を招き、帝国主義が構造的搾取をもたらす。
- \*レーニン (V.I. Lenin)：資本主義の最高段階としての帝国主義

### 3. グローバリズムのイメージに関連する理論

#### \*従属論

近代化（工業化）が搾取と従属をもたらす。  
ラテンアメリカの事例の分析

#### \*世界システム論

ウォーラーステイン (I. Wallerstein) による「世界帝国」と「世界経済」の区別  
1500年頃から（資本主義）世界経済の時代に  
分業／生産の分業から生じる不平等

#### 4. 変化

- \* 国際関係の歴史には周期（周期的パターン）があるという考え
  - 歴史の構造的解釈
  - 大国の興亡の仮説
- \* 世界経済における変化
  - 行為体や地域の地位ないし位置の変化
  - 資本主義の成長・収縮
- \* 世界資本主義システム自体の変化
  - 理念の役割、革命の可能性
  - 代替としての社会主義
  - 新たな政治的議題：第三の道？

#### 5. 評価のための質問

- \* 理念は世界を変えることができるのか？
- \* 国際関係論において「批判理論」(critical theory) の果たすべき役割はあるのか？
- \* 低開発における国際構造と国内状況（国家、社会、経済）の相対的  
重みは？
- \* 諸国民、諸国家、諸地域の間での軍事的、政治的、経済的、文化的接  
触の影響はどのように比較できるのか？
- \* 「グローバリズム」の理解は今日の「グローバル化」を評価するの  
に役立つだろうか？

## 人々の移動と国際関係

1. 人類の歴史における人々の移動
  - \* 人類の起原と移動
  - \* 農業、文明、言語、歴史
  - \* 伝染病と細菌
2. 近代国際関係以前
  - \* 古典ギリシャ
  - \* ローマ時代
  - \* 大航海の時代
3. 近代国際関係
  - \* 国家と領土
  - \* 土地、都市、人口、流通、生産
  - \* 医学、科学、技術
4. 国民国家と移民
  - \* 19世紀からの動向
  - \* 戦争と避難民、亡命者
  - \* 移動労働者と経済発展
  - \* 国内移動と国際移動
5. 20世紀の国際的な難民保護と援助制度
  - \* 第一次大戦後のフリョフ・ナンセン
  - \* 第二次大戦後の難民高等弁務官 (UNHCR)
  - \* 冷戦における亡命者と人々の移動
  - \* UNHCR の拡大した役割
  - \* ベルリンの壁；ヘルシンキ・プロセス (CSCE) と人の移動；1989年の人の移動
  - \* 冷戦後の難民

- 6. 移民と労働者移動
  - \* 出国と入国管理
  - \* EU と人の移動(アムステルダム条約)
  - \* 多国籍企業と移動労働者
  - \* 国境線と国内社会
  
- 7. 現代問題
  - \* グローバル化と人の移動
  - \* 庇護を求める人
  - \* 倫理の危機
  - \* 安全保障と社会安定
  - \* 移動労働者と国籍法
  - \* テロと人権

## グローバル化—その光と影

### 1. グローバル化（グローバリゼーション）とは何か？

#### \*物質的側面

情報通信と交通

製造と金融

ヒト・モノの移動

標準化

制度的結び付き

生態系共有財（エコロジカル・コモンズ）

#### \*非物質的側面

同一視、価値の近似

文化的（言語を含む）類似

政治や組織の象徴

共有された考えとイデオロギー

### 2. グローバリゼーションの3つのタイプ（Robert Kudrleによる）

#### \*コミュニケーション・グローバリゼーション

経済的影響

文化的影響

比較の影響

#### \*市場グローバリゼーション

貿易

資本の移動性

労働力の移動性

国家の選択肢

#### \*直接的グローバリゼーション

環境共有財

その他の公共財：「存在価値」

労働者の権利と人権

実施のパターンと問題

### 3. 国際関係とグローバリゼーション

#### \*主権と脱主権

テロリズム：2001年9月11日の後

犯罪組織

伝染病

新しい行為体、新しい規範、新しい体制、新しいネットワーク

#### \*21世紀の国際組織

国家を越えて

国際公務員

非政府組織（NGO）との相互作用

国連改革

WTOの新ラウンド

国際会議による統治

#### \*市民社会

多国籍企業

NGO

参加と民主化

### 4. グローバリゼーションを評価する：光と影

\*貧困からの救出←→貧富の差の拡大

\*先端的な医療←→地球規模の伝染病

\*環境保護の対策←→地球の環境汚染、温暖化

\*情報社会の長所と短所

## ガバナンス（統治）

### 1. 歴史的背景

- \* ヨーロッパの国家システム
- \* 帝国から脱植民地主義へ
- \* 20 世紀における普遍的な国際機構（国際組織）の出現
- \* 宗教団体
- \* 企業（多国籍企業、MNC）
- \* 同盟と地域機構

### 2. 概念

- \* ガバナビリティー（統治性）とガバナンス（統治）
- \* グッド・ガバナンス（良い統治）
- \* 国際統治
- \* グローバル・ガバナンス（地球統治）
- \* レジーム（体制）
- \* 共治（cogovernance）

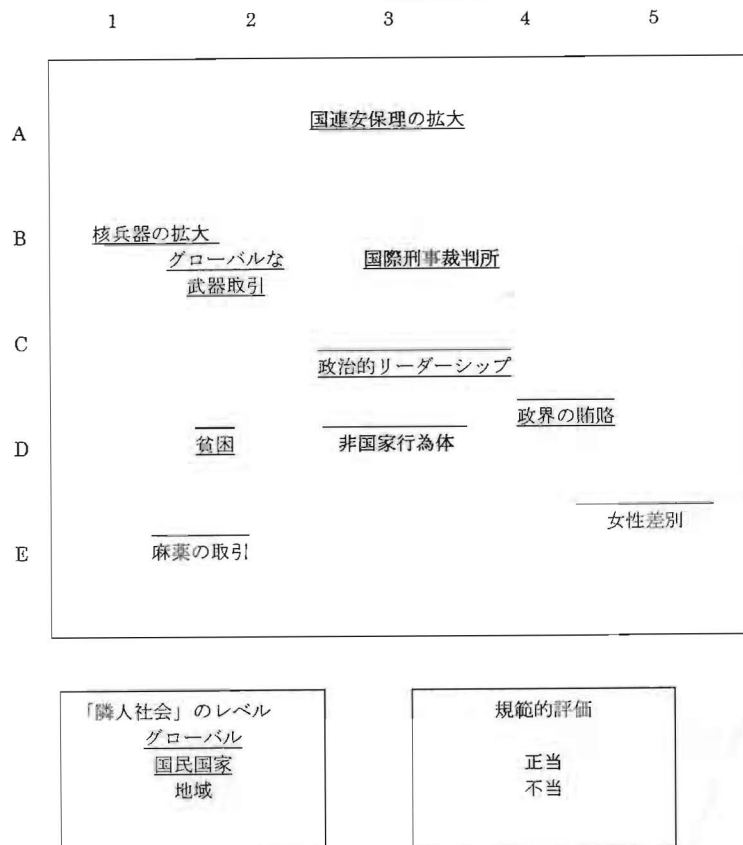
### 3. ガバナンスの議題

- \* 環境：持続可能な発展
- \* 国際機構の改革
- \* 人権が侵害された際の介入
- \* 境界線と人の移動
- \* 刑法：国際犯罪裁判所（ICC）
- \* NGOのネットワークと国際的な意思決定
- \* 平和構築と平和維持
- \* 知的所有権
- \* 世界貿易・金融の構造
- \* ヒトと植物の遺伝子

#### 4. ガバナンスの軸



図 2. グローバルな統治の問題領域





## 理論の軸—協調と対立

1. 比較と対比によって学ぶ。
  - \* 同じ人間行動でも国際関係において違う意味を持つことがありうる。
  - \* 弁証法的思考過程：反対のことから学ぶ。
  - \* 現代世界政治を極のある軸から捉えることがよくある：高次元政治と低次元政治、権力と価値、協調と対立
2. 伝統的な見方によれば、国際関係とは諸国民国家が紛争、闘争、競争を繰り返す闘技場である。
  - \* 第二次世界大戦後の東西対立
  - \* 国際政治経済に対する南北の視点
  - \* ゲームの理論では、ゼロサムゲームと非ゼロサムゲームが扱われる。
3. 近代国際関係における共通の象徴と規範は、協調に有益である。
  - \* 主権の相互承認
  - \* 外交の儀礼と行為
  - \* 国際的な慣習と国際条約：国際社会の法
  - \* 国際組織の設立と発展
4. 冷戦時代の米ソ関係は、国家間の相互作用の複雑な性格を示した。
  - \* 米ソは味方から敵へと変わり、その後、緊張緩和の時代を迎えた。そして、1970年代終わりから1980年代初めにかけて再び緊張が高まった時期を経て、ついに冷戦の終結がもたらされ（「ヤルタからマルタへ」）、欧州安全保障協力会議（CSCE）

では新しいヨーロッパのためのパリ憲章が採択された（1990年11月）

- \* 冷戦時代における「勢力圏」の相互認識
- \* 直接的武力紛争の回避：キューバミサイル危機、代理戦争
- \* 軍備管理と軍備縮小への共通の努力（START III）

#### 5. 新しいパターン

- \* 冷戦後の紛争とガバナンス
- \* 2001年9月11日後の協調と対立

#### 6. 経済協力

- \* OECD や G-7（G-8）を通じた主要国の政策協調
- \* 第二次世界大戦後の国際制度（たとえば、世界銀行、IMF、ガット WTO）
- \* 協調行動や国際体制（レジーム）における利益の収斂あるいは共通利益
- \* 地域的経済機構には協調と競合の両方が見られる
- \* 2008年-2009年の金融危機とその後の新金融体制の国際交渉

#### 7. 軍事的および政治的問題

- \* 勢力均衡や同盟のような伝統的パターンには紛争と協調の両面がある
- \* 覇権国：ローマの平和、パックス・ブリタニカ、パックス・アメリカーナなど
- \* 欧州安全保障協力会議（CSCE）、1995年以降の欧州安全保障協力機構（OSCE）は協調と紛争の絡み合った関係を示している。他地域のモデルとなり得るだろうか？
- \* NATO 拡大及び NATO とロシアの協調関係

## 国際関係論と人間

1. ともに暮らす人々—小集団、規模の大きい共同体、国際社会—にとって、文化は不可欠である。
  - \* 互いの言説は人間の言語に基づいている。
  - \* 思想、想像、理念は共通の意味を与える。
  - \* 宗教、政治、世界観に基づいた共同体をとうして、価値観が空間と時間を超えて人々の一致をもたらす。
  
2. ソーシャル・コンストラクティヴィズム(社会構成主義)はエイジェントとしての人間を強調する国際関係(とその他の社会的な相互作用)の観点を与える。
  - \* 構造は所与のものではなく人間の思想と意思の産物として見られる。
  - \* 国家、国際組織、企業、とその他の集合体(協会)は皆、人間が作った制度である。
  - \* 物質的な状況、資源、能力と違う要素を目立たせる。
  - \* 選好(preferences)と利益は変わりうる。むしろ、そのものが人間の深い意味と価値を反映する。
  
3. 言説、レトリック、言語は人間的な意味と価値を理解し、分かち合う手段である。
  - \* 伝統的なレトリックの区別
    - Logos(ロゴス): 理性の区分(物自体)
    - Ethos(エトス): (主体の)判断と選択の道義的な価値

Pathos(パトス)：(他者との相互作用における) 言説の感情

- \* ポストモダンな脱構築 (解体 deconstruction) はテキストと下部テキストのさまざまな意味を分ける。
- \* 言語は私たちの世界の知識と関連し、またその知識が私たちの世界における行為と関連している。

#### 4. 国際関係論に対する認識論の批判が世界の政治に対する実質的な批判に重複する。

- \* 「批判理論」(critical theory) が知識と権力の結びつきを特定する。
- \* 実証主義が強調するのは経験的な現実の統一視点を提供する論理と科学の役割である。
- \* 解釈学が科学的な知識の狭い概念と「事実」(fact)と「価値」(value)の間違った二分法を挑戦する。
- \* 国際関係に関するフェミニズム理論は無視される社会のパターンとイデオロギーの抽象的概念を挑戦し、人間平等と人間関係の観点を改めて主張する。
- \* 地球政治を築く規範と理念についての関心が高まり、現代の国際関係論の規範研究に影響を及ぼしている。

#### 5. アイデンティティの政治

- \* 地球文化の問題
- \* 情報、知識、価値
- \* 政治制度：下位国家、国家をまたがる地域 (国際地域)、地球全体
- \* 市民社会
- \* 世界のための人間像

## コンストラクティヴィズム

1. このノートで論じられる「国際関係」の3つのイメージは、グローバルな相互作用のアクター、問題、力学に関する別個の見方を提示する。

\*分析者の前提と主たる問題は、世界の出来事についての記述と説明と結論に影響を及ぼす。

\*グローバルなエージェントとアカデミックな分析者は、政治、経済、社会、文化などの潮流について、共通の、あるいは異なる認識を有するかもしれない。

2. 1980年代から、多くの学者がコンストラクティヴィズム（構成主義）ないし社会構成主義と漠然と呼ばれる、もうひとつのアプローチから国際関係を検討している。

\*コンストラクティヴィストが検討する主要な問題には次のものがある：理念、規範、ルール、知る方法、アイデンティティ。

\*コンストラクティヴィストは、人間が社会集団の中で一緒に省察し、それによって言葉と行動の（共通の）意味を構成する過程に目を向ける。

\*エージェントの思想と行動との内省的かつ相互作用的な過程がエージェントとその行動の意味をつくりだす。

\*人間の現実を構成する過程は多くの領域で生じているので、このものの見方は他の人間（社会）の活動はもとより「国際関係」の狭い考察に限定されない。

\*コンストラクティヴィストと考えられている著名な国際政治学者には、N・オナフ、K・クラトハヴィル、J・ラギー、A・ウエントなどがいる。これは多くの異なるアプローチをカバーする緩やかな範疇である。

3. コンストラクティヴィストは認識論に重点を置く。このことは、例えば、安全保障、秩序、開発、環境など他のいくつかのアプローチに見られる実在的問題と対照的である。

\*こうした実在的問題についての人々の期待や価値はどのように形成されているのか？

\*エージェント（政治指導者、社会集団、あるいは観察者）は行動がどうなるべ

きだと認識するのか？

- \*これらのエージェントはどのような価値を行動によって実現しようとしているのか？
- \*これらのエージェントの行動が変化する動機と変化する過程はどのようなものか？
- \*「誰かが特定の政策を想像したのはなぜか？」あるいは「人々にとって何かが重要なのはなぜか？」が国際関係のイシューを理解するのに重要な問題となっている。

4. コンストラクティヴィストは、国際関係のエージェントの間主観的意味に重点を置く。このことは他のいくつかのアプローチが構造に注目するのと対照的である。

- \*静的な構造の特徴ではなく社会過程が最大の焦点である。
- \*文化、宗教、世界観はエージェントを奥深いところから構成すると見られる。
- \*アイデンティティは多くのコンストラクティヴィストのアプローチに見られるテーマである。
- \*人間の行動の動機は物質的利益を得ることよりも複雑であると考えられる。個人あるいは集団がどのようにアイデンティティを構成、表明、変化、防御するのかは社会構成主義者にとって重要な問題となる。

5. 言語と言説の重要性がコンストラクティヴィズムによって強調されている。

- \*公の議論のレトリックを注視することは、国際関係に対する、より一般的には政治に対する、いわゆる「批判的」アプローチの一部でもある。言語は意味を表すので、偽りの理念や危険な理念を発見する手がかりとなるかもしれない。
- \*言説の変化は公共の領域における変化を記す。行動の社会的あるいは公的な境界は、ある言説が支配的になったり、重要でない役回りに追いやられたりする過程の中にしばしば発見される。
- \*言葉で表された（また言葉で表されない）象徴は理念の世界の一部であるが、それは物質的条件と同じくらい公的生活（国際関係を含む）を構成する。したがって、コンストラクティヴィストの洞察は、行動の狭いアプローチよりもすぐれた精神的問題の分析をもたらすかもしれない。

(第十三章訳：須田祐子)